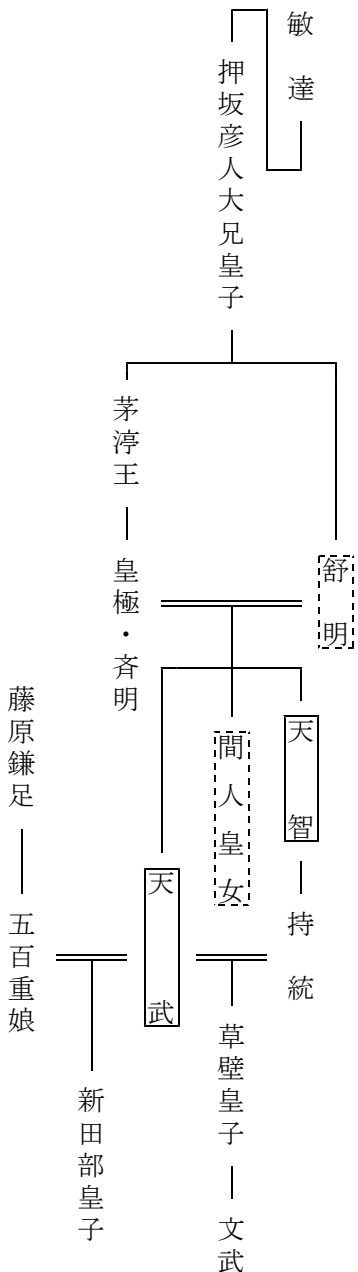


天智・天武を中心



天智天皇・天武天皇関係年表

西曆	六二六 六二七 六二八 六二九 六三〇 六三一 六三二 六三三 六三四 六三五 六三六 六三七 六三八 六三九 六四〇 六四一 六四二 六四三 六四四	年号	推古三四 舒明三六 皇極元三	天皇	舒明 皇極	先皇		執政	蘇我蝦夷 蘇我馬子没	事項	蘇我馬子没 推古天皇没 遣唐使のはじめ 伊予の湯に行幸 山背大兄王自殺	智天	19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	武天	14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
----	---	----	----------------------	----	----------	----	--	----	---------------	----	---	----	---	----	---

六八二	一一	持	文	多治比	
六八三	一二	統	武	島	
六八四	一三	元			大津皇子朝政に参画。富本銭発行
六八五	一四	元			八色の姓を制定
六八六		元			天武天皇没。大津皇子刑死
六八七		元			草壁皇子没
六八八		元			持統天皇即位
六八九		元			高市皇子
六九〇		元			高市皇子没
六九一		元			藤原宮に遷都
六九二		元			
六九三		元			
六九四		元			
六九五		元			
六九六		元			
六九七		元			
六九八		元			

天皇、香具山に登りて望国したまふ時の御製歌

①大和には 群山あれど とりよろふ 天の香具山 登り立ち 国見をすれば 国原は
 煙立ち立つ 海原は 鷗立ち立つ うまし国そ 蜻蛉島 大和の国は(一・二)舒明

《参考》

*伊豫国の風土記に曰く、伊与郡。郡家より東北のかたに天山あり。天山と名づくる由は、倭に天加具山あり。天より天降りし時、二つに分れて、片端は倭国に天降り、片端は此の土に天降りき。因りて天山と謂ふ。本なり。(釈日本紀 卷七)

岡本天皇の御製歌一首

②夕されば小倉の山に鳴く鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも(八・一五一一)秋雑歌

《参考》

泊瀬朝倉宮に天の下知らしめしし大泊瀬幼武天皇の御製歌一首

*夕されば小倉の山に臥す鹿は今夜は鳴かずい寝にけらしも(九・一六六四)

右は、或る本に曰はく、岡本天皇の御製なりといへり。正指を審らかにせず。これに因りて以ちて累ねて載す。

岡本天皇の御製一首 短歌を并せたり

③ 神代より 生れ継ぎ来れば 人多に 国には満ちて あぢ群の 去来は行けど わが恋
 ふる 君にしあらねば 昼は 日の暮るるまで 夜は 夜の明くる極み 思ひつつ 眠
 も寝がてにと 明しつらくも 長きこの夜を (四・四八五) 舒明か斉明

反歌

④ 山の端にあぢ群騒き行くなれどわれはさぶしゑ君にしあらねば (四八六)

⑤ 淡海路の鳥籠の山なる不知哉川日のころごろは恋ひつつもあらむ (四八七)

右は、今案ふるに、高市岡本宮、後岡本宮、二代二帝、各々異なり。ただ岡本天皇といふは、未だその指すところを審らかにせず。

天皇、宇智の野に遊獵したまふ時、中皇命の間人連老をして献らしめたまふ

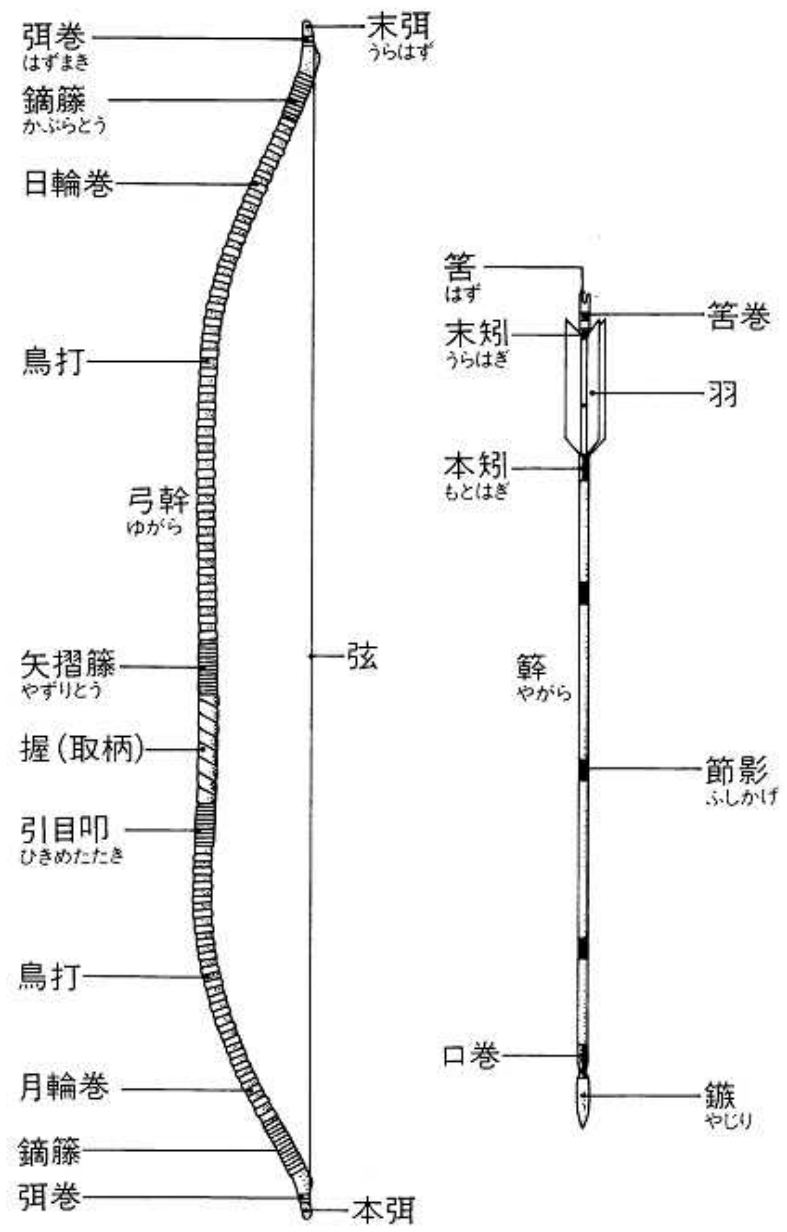
⑥ やすみしし わご大君の 朝には とり撫でたまひ 夕には い倚り立たしし 御執らしの 梓の弓の 奈加弭の 音すなり 朝獵に 今立たすらし 暮獵に 今立たすらし

反歌

⑦ たまきはる宇智の大野に馬並めて朝踏ますらむその草深野 (四)

《参考》

* ⑥の歌の「奈加弭」が意味不明。



弭 ゆはず

弓の両端で弦をかけるところをいう。…：弓が木製であるばあいには、その両端を細く、あるいは扁平に削って弦をかけやすくし、溝や切りこみを作って弦がはずれないようにしたものが多い。これを木弭きゆはずとすれば、骨・角を彫刻して弓の両端にはめたものは骨弭・角弭、金銅・銀などの金属で作ってかぶせたものは金弭かなはずである。弓が腐朽して弭だけが遺物として出土するばあいには、それぞれ弭形角製品、弭金物などと呼んでいる。弭形角製品は縄文時代後期・晩期に多く、長さ3〜6寸、底面から穿った円錐形の孔に木弓の末端を挿入したものである。弭金物は5〜7世紀の古墳時代の遺品があつて、長さ6〜7寸、円筒形の基部と幅を薄くした末端との界に、斜面を形成している。…：

〔小林 行雄〕

（『世界大百科事典』）

一張 長七尺二寸七分 鹿毛漆 末弭繼銅 目判 紫皮纏弓把
名金弭 錦袋緋綾裏



（東大寺献物帳）

中大兄 近江宮に天の下知らしめしし天皇の三山の歌

⑧香具山は 畝火ををしと 耳梨と 相あらそひき 神代より 斯くにあるらし 古昔も
然にあれこそ うつせみも 婦を あらそふらしき（一・一三）天智

反歌

⑨香具山と耳梨山とあひし時立ちて見に來し印南国原（一四）

⑩わたつみの豊旗雲に入日見し今夜の月夜さやに照りこそ（一五）

右一首の歌、今案ふるに反歌に似ず。ただし、旧本此の歌を以ちて反歌に載す。故に今なほ此の次に載す。また紀に曰はく、天豊財重日足姫天皇の先の四年乙巳に天皇を立てて皇太子となすといへり。

《参考》

*上岡の里。本は林田の里なり。土は中の下。出雲の国の阿菩の大神、大倭の国の畝火・香山・耳梨の三つの山相闘ふと聞きたまふ。此に諫め止めむと欲して、上り來ましし時に、此処に到るすなはち闘ひ止むと聞かして、その乗らす船を覆へして、坐しき。故、神阜と号く。阜の形、覆へしたるに似たり。（播磨国風土記 揖保郡）

天皇の御製歌

⑩み吉野の耳我の嶺に 時なくそ 雪は降りける 間なくそ 雨は霽りける その雪の時なきが如 その雨の間なきが如 隈もおちず 思ひつつぞ来し その山道を (一・二五) 天武

天皇、吉野の宮に幸しし時の御製歌

⑫よき人のよしとよく見てよしと言ひし芳野よく見よよき人よく見 (一・二七) 天武
紀に曰はく、八年己卯の五月庚辰の朔の甲申、吉野の宮に幸すといへり。

《参考》

a 五月の庚辰の朔 甲申に、吉野宮に幸す。乙酉に、天皇、皇后及び草壁皇子尊・大津皇子・高市皇子・河嶋皇子・忍壁皇子・芝基皇子に 詔して曰はく、「朕、今日、汝等と俱に庭に盟ひて、千歳の後に、事無からしめむと欲す。奈之何」とのたまふ。皇子等、共に対へて曰さく、「理実灼然なり」とまうす。則ち草壁皇子尊、先づ進みて盟ひて曰さく、「天神地祇及び天皇、証めたまへ。吾兄弟長幼、并て十余王、各異腹より出でたり。然れども同じきと異なりと別かず、俱に天皇の勅に随ひて、相扶けて忤ふること無けむ。若し今より以後、此の盟の如くにあらずは、身命亡び、子孫絶えむ。忘れじ、失たじ」とまうす。五の皇子、次を以て相盟ふこと、先の如し。然して後に、天皇曰はく、「朕が男等、各異腹にして生れたり。然れども今一母同産の如く慈まむ」とのたまふ。則ち襟を披きて其の六の皇子を抱きたまふ。因りて盟ひて曰はく、「若し茲の盟に違はば、忽に朕が身を亡さむ」とのたまふ。皇后の盟ひたまふこと、且天皇の如し。

(日本書紀 天武八年五月)

b 天皇、有司に命せて壇場を設けて、飛鳥淨御原宮に即位す。正妃を立てて皇后とす。后、草壁皇子尊を生れます。先に皇后の姉大田皇女を納して妃とす。大来皇女と天津皇子とを生れます。次の妃大江皇女、長皇子と弓削皇子とを生れます。次の妃新田部皇女、舍人皇子を生れます。又夫人藤原大臣の女氷上娘、但馬皇女を生めます。次の夫人氷上娘の弟五百重娘、新田部皇子を生めます。次の夫人蘇我赤兄大臣の女太薙娘、一の男・二の女を生めます。其の一を穂積皇子と曰す。其の二を紀皇女と曰す。其の三を田形皇女と曰す。天皇、初め鏡王の女額田姫王を娶して、十市皇女を生します。次に胸形君徳善が女尼子娘を納して、高市皇子命を生します。次に宋人臣大麻呂が女檄媛娘、二の男・二の女を生めます。其の一を忍壁皇子と曰す。其の二を磯城皇子と曰す。其の三を泊瀬部皇女と曰す。其の四を託基皇女と曰す。(日本書紀 天武二・二・二七)

c 古人大兄皇子の女倭姫王を立てて、皇后とす。遂に四の嬪を納る。蘇我山田

石川麻呂大臣の女あり、遠智娘と曰ふ。或本に云はく、美濃津子娘といふ。一の男・二の女を生めり。其の一を大田皇女と曰す。其の二を鸕野皇女と曰す。天下を有むるに及びて、飛鳥浄御原宮に居します。後に宮を藤原に移す。其の三を建皇子と曰す。唾にして語ふこと能はず。或本に云はく、遠智娘、一の男・二の女を生めり。其の一を建皇子と曰す。其の二を大田皇女と曰す。其の三を鸕野皇女と曰すといふ。或本に云はく、蘇我山田麻呂大臣の女を茅渟娘と曰ふ。大田皇女と娑羅羅皇女とを生めりといふ。次に遠智娘の弟有り、姪娘と曰ふ。御名部皇女と阿陪皇女とを生めり。阿陪皇女、天下を有むるに及びて、藤原宮に居します。後に都を乃樂に移す。或本に云はく、姪娘を名けて桜井娘と曰ふといふ。次に阿倍倉梯麻呂大臣の女有り、橘娘と曰ふ。飛鳥皇女と新田部皇女とを生めり。次に蘇我赤兄大臣の女有り、常陸娘と曰ふ。山辺皇女を生めり。又宮人の、男・二の女を生めり。其の一を大江皇女と曰す。其の二を川嶋皇子と曰す。其の三を泉皇女と曰す。又栗隈首徳萬が女有り、黒媛娘と曰ふ。水主皇女を生めり。又越の道君伊羅都売有り、施基皇子を生めり。又伊賀采女宅子娘有り、伊賀皇子を生めり。後の字を大友皇子と曰す。(日本書紀 天智七・二・二二三)

*吉野盟約時(六七九年)の天智天武の男子の年齢

- ・草壁皇子……十八歳
- ・大津皇子……十七歳
- ・高市皇子……二十六歳
- ・川嶋皇子……二十三歳
- ・忍壁皇子……(不明)
- ・芝基(施基)皇子……(不明)

- ・故人……建皇子、伊賀皇子(大友皇子)
- ・舍人皇子……四歳
- ・不明……長皇子、弓削皇子、新田部皇子、穗積皇子、磯城皇子

天皇、藤原夫人に賜ふ御歌一首

⑬わが里に大雪降り大原の古りにし里に落らまくは後(二・一〇三)天武
藤原夫人、和へ奉る歌一首

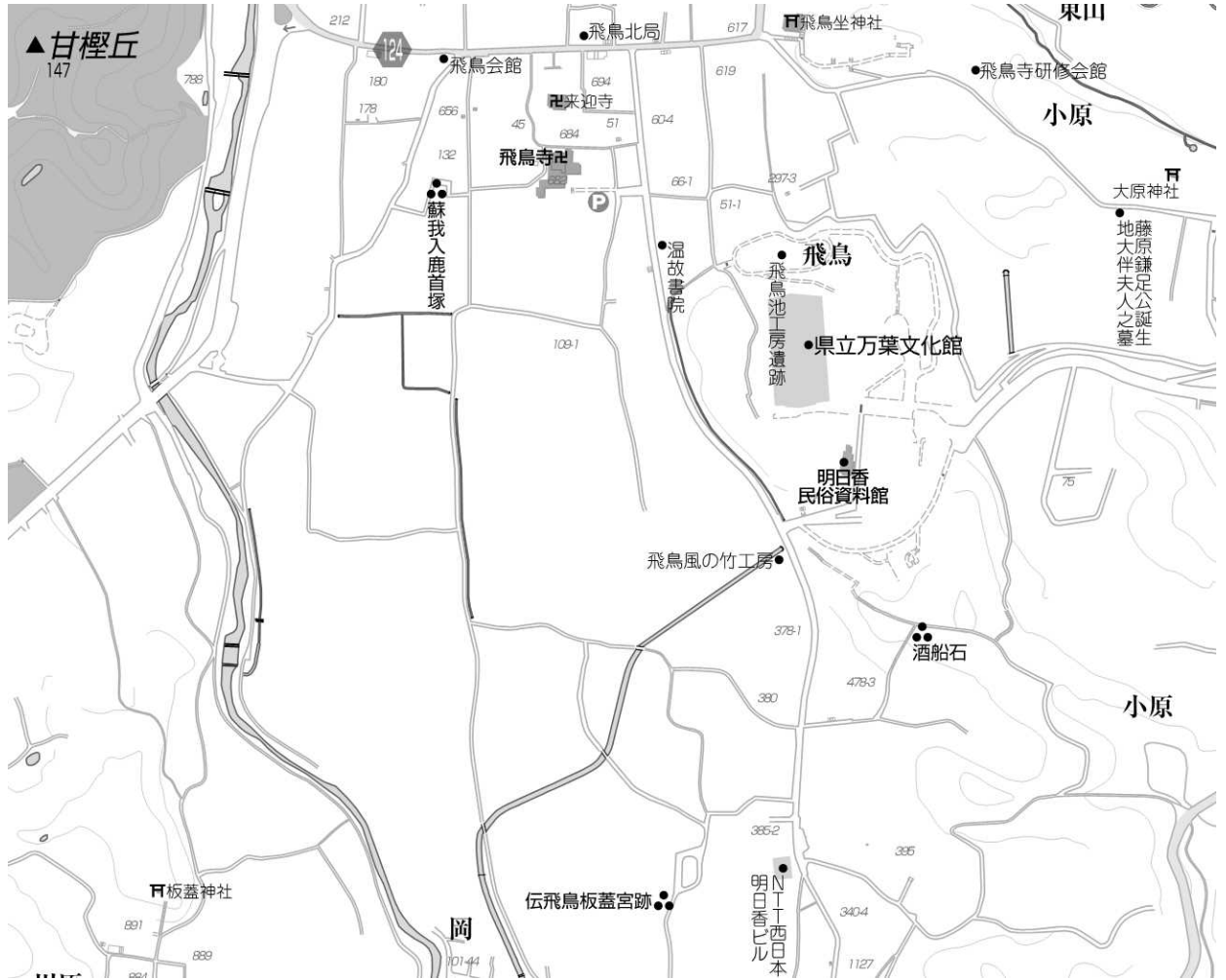
⑭わが岡の竈に言ひて落らしめし雪の摧けし其処に散りけむ(一〇四)藤原五百重娘

《参考》

*明日香清御原宮に天の下知らしめしし天皇の夫人なり。字を大原の大刀自といへり。即ち新田部皇子の母なり。(八・一四六五の題詞「藤原夫人の歌一首」の下注)

⑮ 春過ぎて夏来るらし白栲の衣乾したり天の香具山（一・二八）持統

天皇の御製歌



持統